

《予算決算委員会 総括質疑（令和2年9月28日）》

〈要旨〉

・今後の奈良市総合福祉センターの在り方について

〈会議録〉

◆林政行

無所属の林 政行です。よろしく申し上げます。

今回、施設利用者の感染リスク低減のため、奈良市総合福祉センター体育館の換気設備の修繕の補正予算300万円に関連し、総合福祉センターの在り方について伺います。

総合福祉センターは、本市の障害のある方々にとって、また、支援者の方々にとって大切な集いの場であり、生活の場であります。現在のコロナ禍により、利用者にとって、その場がいかに大切なものであったのか改めて思い知らされています。

御主人が障害をお持ちの御高齢の御夫婦は、歌うことなどが大好きで、コロナ禍前、総合福祉センターで実施されている行事に積極的に参加されておられました。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、多くの施設が休館、休業となり、総合福祉センターもその一つとなっています。

御主人は車椅子、奥さんが常に車椅子を押す生活で、気晴らしなどで気軽に散歩できる状況でもありません。そんな中、御夫婦の生活は一変し、自宅中心の生活となってしまったのです。その後、総合福祉センターは再開されますが、その頃には御主人の体力は衰え、現在は寝たきりになられたとのこと。また、奥さんもコロナ禍前にお会いしたときより明らかに元気がなくなっておられました。

現在の奈良市は施設のバリアフリー化が進んでいますが、一歩外に出るとバリアが多いのが当たり前の状況で、御高齢になればなるほど気軽に散歩にも行けません。御高齢の方が車椅子を押して散歩することはまず無理と言って過言でない環境です。だからこそ、その御夫婦にとっては総合福祉センターが唯一の心のよりどころであり、生きがいと体力維持や向上につながっていたと思います。

昨年、市長より心のバリアフリーについて、一人一人が障害のあるなしにかかわらず、様々な課題を抱えた方々の立場に立って行動することが大切であり、このことが全ての人々が安心して暮らせるまちづくりにつながっていくものと考えているとの答弁をいただいています。

また、現在、総合福祉センターの在り方について検討しているとのこと。このようなことを二度と起こさないため、これからの総合福祉センターは、コロナ禍のような事態が起きても福祉の向上を停滞させず、安全・安心に利用できる在り方に早急に変えていくべきで

ありますが、今後、市長が目指す総合福祉センターはどのような在り方であるべきと考えておられるのかお聞かせください。

◎仲川元庸市長

林委員の御質問にお答え申し上げます。

総合福祉センターの役割についてということではありますが、今回コロナの影響によりまして、特に基礎疾患等をお持ちの方が多いということもありまして、臨時的に施設を利用停止にさせていただいたところでございます。御利用いただいていた皆様方には、大変申し訳ない思いでございます。

今後、また新型コロナの影響がどの程度まで及ぶかということは見通しが立たない部分がございますけれども、やはり障害をお持ちの方やその御家族、支援者の方にとって集いの場、また生活の場として大変重要な役割を持っている施設であるということに鑑みて、管理の面を最優先するということだけではなくて、利用者の視点で、なるべく閉鎖をせずに継続して御利用いただけるように、市としても最大限配慮をさせていただきたいというふうに考えております。

◆林政行

市長、心強いお言葉、ありがとうございます。

私は、コロナ禍を受けて福祉の大切さを改めて感じるとともに、これまで気づかなかった多くのことを学んでいます。それは市役所も同じであると思っており、特に福祉部は福祉に直面する当事者が身近におられるからこそ、多様なニーズに関する多くの情報が入っていると思います。

今後、奈良市が求められているのは、それをいかに具体的に施策や施設などに反映させていくかであります。当初は新型コロナウイルスについての対処に不明な点が多かったため、総合福祉センターの休館は致し方ない判断だったと思います。しかし、今後予期せぬ事態が生じた場合でも、ふだんから危機管理体制を整えておくなど、総合福祉センターはより迅速で慎重な判断が求められます。

今回の事例から、この御夫婦の日常生活にとって総合福祉センターの存在価値はとても大きかったことは言うまでもなく、生きがいでありました。総合福祉センターの理念である、障害者のための相談、医療、訓練、作業、スポーツ、レクリエーションなどをはじめとする一貫したリハビリテーション機能を持つ総合施設という認識を忘れることなく、安心して過ごせる施設の在り方を求めます。

また、これまで心のバリアフリーを市や教育委員会に訴えてきた一人として至らなさも痛感していますが、現実には障害者に対する心ない差別事象が起っています。

具体的には、視覚障害者がスーパーなどで買物する際、どうしても一度に複数の商品に触ってしまうこともあり、露骨に嫌悪感を示すお客がおられます。コロナなどのウイルスは物にも付着するおそれがあるため、買物客が嫌な気持ちになるのも分かります。例えば、事態が落ち着くまで市が移動販売の業者を手配し、総合福祉センターで買物ができるように対応することも一つの案です。

安心・安全に完璧はありません。しかし、できる限りの対策は必要ですが、決して環境を整えればいいというものでもありません。最後は障害者の方々を支える人が最も重要であり、コロナ禍のような事態が起きても福祉の向上を停滞させない人と人のつながりを最大限に維持していく検討が重要となります。

障害者の多くは、コロナ禍であってもどのような状態や状況であれば外に出ることが可能であるか理解しておられます。その一人一人の判断の下、総合福祉センター開所を求める声があるのなら、総合福祉センターは即時対応しなければなりません。

総合福祉センターの在り方については、これらのことを要望、改善していただくとともに、今後、第5次総合計画の策定において、福祉政策においては私が訴えたことも含め、コロナ禍で得た教訓を十二分に反映した計画を策定いただきますよう強く要望いたします。

これで私の質問を終わります。ありがとうございました。